【使命】 ＝基本理念（美術館のめざす姿）	静岡県立美術館は、創造的で多様性に富んだ社会を実現していくために存在します。 そのために、人々が多種多様な美術表現を体験し、新たな価値と出会い、考え、理解し合う場を提供するとともに、学校や地域社会との連携を積極的にめざします。 その活動の基盤にコレクションを位置づけ、成長させ、未来へと伝えます。

基本方針	計画（P）								実施状況（D）	評価（C）
	重点目標		評価指標		R1実績 開館274日	R2実績 開館276日	R3実績 開館138日	R4目標	R4実績 開館274日	自己評価
A 特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用します	1	収集方針に従い持続的に作品を収集します	1	作品購入件数・価格（件・千円）	3 10,000	4 9,050	5 9,470	—　千円	0　件 0　千円	【成果】 ・76点の作品をご寄贈いただき、コレクションを充実させることができた。 ・このうち70点の現代美術作品を寄贈くださった太田正樹氏（令和4年度没）からは、15年に及ぶ継続的なご寄贈により計106点の作品を頂戴しており、太田正樹コレクションは当館を特色づける重要な一画を占めることとなった。これまでの美術館および担当学芸員との信頼関係の賜物と考える。 ・収蔵品による企画展を2本開催し（「絶景を描く　江戸時代の風景表現」、「近代の誘惑―日本画の実践」）、企画展を通したコレクションの魅力発信を重点的に行った。 ・特集展示「輞川図と蘭亭曲水図」にあわせて関連シンポジウムを開催した。発端となった《輞川図巻》は、企画展開催を機にご寄贈いただいたもので、3ヵ年に渡る修理を経て適切な状態で展示ができるようになり、修理後の初公開を記念してシンポジウム開催に至ったものである。さらにこの成果は記録集として刊行する。調査研究・収集・保存・公開という美術館の根幹をなす活動を高いレベルで結びつけ、大きな成果を挙げたものといえる。 【課題】 ・収集方針に則った継続的な収集活動のために、購入予算の確保が切実な課題である。 ・予算逼迫は修復予算の縮減にも表れているが、コレクションの適切な保存管理、後世への継承のために、メリハリの効いた予算の確保・執行の仕組みを整える必要がある。
			2	作品寄贈件数・価格（件・千円）	16 10,770	4 6,800	9 73,900	—　件 千円	76　件 1,099,050　千円	
	2	コレクションの新たな価値を発見し広く発信するとともに、適切に後世に伝えていきます	3	収蔵品の公開件数（件）	307	378	231	380　件	393　件	
			4	収蔵品展のみの観覧者数（人）	10,542	10,443	2,619	10,000　人	8,296　人	
			5	ロダン館の観覧者数（人）	64,700	76,874	25,261	60,000　人	51,380　人	
			6	収蔵品に関する調査研究の発表回数（回）	※	※	7	10　回	6　回	
			7	コレクションを活用した教育普及プログラム数（件）	20	14	12	15　件	16　件	
			8	修復したコレクションの件数・費用（件・千円）	※	※	32 3,699	4,000　千円	6　件 496　千円	
			9	公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート【定性】	—	—	—	—	別添	
B 人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します	1	新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します	10	展覧会の来館者数（人）	113,362	141,893	53,247	118,000　人	98,861　人	【成果】 ・改修工事後の枯らし期間（化学物質の換気期間）を利用して、美術館の隠れた諸機能を紹介する「大展示室展」を開催。作品が一切無い変化球の展覧会であったが、担当者の工夫と努力により美術館の知られざる一面を分かりやすく効果的に示し、好評を得た。 ・兵馬俑を中心とする中国古代の歴史・文化を紹介する展覧会を開催、中国文明に関心を持つ人々の期待に応えることができ、多くの観覧者数に結び付いた。全日時間制予約を導入することで、安全に来場者を迎えることができた。 ・先鋭的な現代美術作家鴻池朋子の展覧会を開催、展示室だけでなく美術館裏山をも活用した新たな視点に基づく展示によって、美術および美術館を問い直す刺激的な内容となった。 ・学芸員による調査研究の発表回数は増加傾向にある。
			11	自主企画・企画参加型の展覧会の回数（回）	4	2	3	4　回	4　回	
			12	作品やテーマに興味を持った人の割合（%）	85.8	90.6	91.8	90.0　%	91.8　%	
			13	展覧会に対する外部評価 【定性】	—	—	—	—	別添	
	2	他の美術館・大学との連携を進め、企画力を強化します	14	調査研究の発表回数（回）	11	10	17	20　回	26　回	【課題】 ・予算縮減のなか、魅力的な展覧会をいかに作っていくかは工夫のしどころであるが、充実した展示のためには適切な予算確保はどうしても必要である。本庁と連携してこの点の改善に努める。 ・コレクションを活用した企画展を2本開催できたことは当館のこれまでの収集活動の成果であるが、他機関からの借用に基づく展覧会を継続して開催し、そのノウハウを蓄積していくことも充実した展覧会企画のためには必須であり、そうした機会を作る必要がある。 ・企画力の強化のための研修・発表機会を今後とも積極的に作っていく。
			15	内部セミナー・研究会・研修の回数（回）	11	10	11	12　回	11　回	
			16	他の美術館や大学と連携した取組件数（回）	3	2	3	3　回	3　回	
			17	調査研究に関する外部評価 【定性】	—	—	—	—	別添	
C 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します	1	質の高い芸術教育と普及のプログラムを開発します	18	学校教育と連携した取り組み数(件) うち特別支援学校と連携した取り組み数（件）	196	67	44 10	100 10　件	91　件 10　件	【成果】 ・感染症への対策をとりつつ、当初予定していた教育普及事業についてはすべてを無事に実施することができた。 ・一旦中止していた事業についても感染状況を注意深く見ながら少しずつ再開させることができた。 ・アーティストによるトークや専門性の高いシンポジウム、障害のある方を対象としたプログラムなど、多様な普及事業を工夫して実施した。 ・デジタルアーカイブを活用した学校向けオンラインプログラムについて、小中学校と連携して開発、試行を行い、5年度当初の本格稼働に結び付けた。 【課題】 ・アフターコロナにおける学校との連携について、元に戻すだけでなく、ウェブの導入や新たな実施方法での活用の促進など、学校とコミュニケーションを取りつつ推進していく。 ・学校向けオンラインプログラムの拡充を図るとともに、一般向けのプログラムについても整備し、代替手段としてではなくwebを積極的に活用した普及事業を進める。 ・合理的な配慮のもと幅広い利用者に安心して利用してもらえるよう、研修等で受入側の準備を整える。
			19	鑑賞系プログラム数（件）	21	15	12	15　件	17　件	
			20	webを活用したプログラム数（件）	※	※	0	2　件	2　件	
			21	普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート 【定性】	—	—	—	—	別添	
	2	講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を充実します	22	講演会等の開催件数（回）	161	48	28	80　回	79　回	
			23	学芸員のフロアレクチャー等の数（回）	100	43	24	50　回	67　回	
			24	館内空間を生かした催事の件数・参加者数（件・人）	69 6,989	15 18,328	1 383	10　件 1,000　人	8　件 1,598　人	
	3	地域住民、企業、文化関係団体等と連携した美術館活動を充実します	25	地域住民等と連携した取組数（件）	8	2	4	4　件	7　件	
			26	地域住民、企業、文化関係団体等と連携した取組に関する職員レポート 【定性】	—	—	—	—	別添	
D さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます	1	広報戦略を策定し、広報の質を高めます	27	美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合（%）	75.0	78.5	80.1	80.0　%	75.5　%	【成果】 ・本年度からデジタルアーカイブの公開を始め、コレクションおよび美術館の所蔵資料に関する情報公開について大きく前進させることができた。コンテンツが増えたためかウェブサイト全体のアクセス数も前年度より増加した。 ・県内大学への大学事務局を通したメール配信を行った。また大学への出講機会の増加に伴い展覧会情報の発信の機会を得た。 【課題】 ・デジタルアーカイブにおける図書情報の公開が一部に留まるため、データの整備と公開のための予算確保が課題である。現代美術関連情報については、ボランティアの尽力によりデータベースへの入力作業が進められており、今後とも連携を強化して推進していきたい。作品作家情報の更新も含めて、公開後のデジタルアーカイブの充実を日常業務に落とし込みながら継続的に進めていく必要がある。 ・SNSについては効果的な発信のための体制づくりが課題である。 ・広報体制の拡充は手つかずであり、各職員が業務の一部として実施している。戦略的に広報を行うには、専門的な知識を有した人材の活用が求められる。 ・コロナ禍で滞っていた観光業界等との連携について、観光需要の回復にあわせて推進していく必要がある。
			28	デジタルアーカイブによる情報発信 作品作家情報の公開・更新件数（件） 現代美術関連資料の公開件数（件） 図書情報の公開件数（件）	※	※	2,934 6,304 22,651	3,200　件 9,000　件 23,150　件	3,222　件 9,534　件 23,293　件	
			29	ホームページのアクセス件数（件）	1,085,837	1,460,987	938,877	1,000,000　件	1,240,277　件	
			30	facebook、インスタグラム、ツイッターのビュー数（件）	※	※	989,677	1,000,000　件	719,846　件	
			31	facebook、インスタグラム、ツイッターのエンゲージメント等の件数（件）	※	※	29,470	30,000　件	24,556　件	
	2	観光業界等と連携した新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます	32	観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数（件）	9	5	6	7　件	7　件	
			33	教育機関への情報発信数（件）	※	※	6	7　件	3　件	
			34	広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート【定性】	—	—	—	—	別添	
E 環境・施設の整備や運営基盤の強化に努めます。	1	館内施設を充実させ、満足度を高めます	35	美術館利用者数（人）	217,675	241,152	77,741	200,000　人	167,009　人	【成果】 ・大勢の来館者を迎えた「兵馬俑と古代中国」展においても、全日時間制予約を導入し来館者の分散を図ることで、安全、快適な鑑賞環境を提供することができた。 ・中期維持保全計画に基づいて施設の改修・整備を適切に行った。 ・レストラン、ミュージアムショップに対す満足度は高い数値を維持している。 ・タカシマヤ文化基金の助成を獲得し、シンポジウムの成果を元にした記録集を刊行することができた。 【課題】 ・開館から35年が経過し、施設の老朽化が進行している。引き続き、施設の適切な維持管理に努めるとともに、中期維持保全計画に基づく改修を計画的に進める。 ・県内企業との関係強化のため、県経営者協会との連携を進め、館長および学芸員による会員向け講座を計画していたが、感染状況の悪化により中止となった。引き続き連携の維持・強化のための働きかけを行っていく必要がある。
			36	鑑賞環境に対する満足度（%）	88.3	80.6	90.3	90.0　%	85.3　%	
			37	レストランに対する満足度（%）	63.0	89.7	92.4	92.0　%	94.4　%	
			38	ミュージアムショップに対する満足度（%）	94.0	91.8	97.1	97.0　%	97.1　%	
	2	周辺環境やアクセスの利便を向上させます	39	来館者のアクセス満足度 上段：公共交通機関利用 下段：自家用車利用	68.6 64.9	68.8 54.7	67.8 55.7	70.0　% 70.0　%	80.9　% 60.3　%	
	3	運営基盤を強化します	40	運営基盤の強化等に関する職員レポート【定性】	—	—	—	—	別添	

※は新設指標のためR2以前の数値無し

	取組の状況	第三者評価委員意見
設置者の取組	・静岡県は、令和5年の東アジア文化都市として選定され、県立美術館の企画展やイベントについて、東アジア文化都市の祝祭プログラム（コア事業）として実施する。 ・県立美術館を初めとした県の文化機関が行う学校向け文化体感プログラムを「ふじのくに文化教育プログラムとしてまとめて冊子化して、学校現場に配布するとともに、校長会等の場で説明し周知している。 ・中期維持保全計画に基づいた改修工事（本館ファンコイルユニット更新など）を行っている。	

基本方針	A　特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用します

計画（P）					実施状況（D）R5.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	備考	自己評価
1	収集方針に従い持続的に作品を収集します	1	作品購入件数・価格（件・千円）	— 千円	0 件 0 千円		【成果】 ・令和4年度については、条例上の基金残高の制限もあり、作品購入は行わなかった。 ・寄贈によって76点の作品がコレクションに加わった。美術館および担当学芸員の日頃の真摯な活動が所蔵者の信頼を得、寄贈に結び付いたものと考える。 ・現代美術70点を寄贈いただいた太田正樹氏（令和4年没）からは、平成20年度以降、継続して作品を頂戴しており、受入総数は106点に及ぶ。近年は当館コレクションに欠けた部分を補うように作品を購入、寄贈くださっており、共にコレクションを育てることを通して美術館を支えてくださる稀有な存在であった。令和5年度収蔵品展のひと枠において「太田正樹コレクション」展を開催予定である。 【課題】 ・収集方針に則った作品の購入を継続していくことは、コレクションを基盤とした館運営のために必須であり、購入予算の確保が切実な課題である。 ・購入・寄贈いずれにおいても、作品の収集は、調査研究、保存、公開等、美術館の基礎的活動の積み重ねが結実してなされるものであり、日頃の活動を堅実に充実させていくことが重要である。
		2	作品寄贈件数・価格（件・千円）	— 件 千円	76 件 1,099,050 千円		
2	コレクションの新たな価値を発見し広く発信するとともに、適切に後世に伝えていきます	3	収蔵品の公開件数（件）	380 件	393 件	指標3 収蔵品展（155）・企画展（147）・移動美術展（45）＋貸出（46） 指標7 内訳は別紙	【成果】 ・所蔵品・寄託品を中心とした企画展を2本開催し、コレクションの価値の発見と発信を重点的に行った。 ・3ヵ年に渡る修理が完了した《輞川図巻》を公開し、あわせて本作にかかるシンポジウムを開催した。適切な修理を施すことにより貴重な文化財を後世へ継承し、その価値を広く発信する活動につなげられたことは大きな成果である。 ・教育普及プログラムにおいても、コレクションの活用を進めることができた。 【課題】 ・作品の保存・継承のために、メリハリのある修復予算の確保・執行が課題である。 ・コレクションにまつわる展示、保存、教育普及、調査研究といった諸活動は県立美術館の基盤を成すものである。重点目標2の充実を図り、継続的、効果的にコレクションの魅力を発信していくことで、作品収集の理解へとつなげていく。
		4	収蔵品展のみの観覧者数（人）	10,000 人	8,296 人		
		5	ロダン館の観覧者数（人）	60,000 人	51,380 人		
		6	収蔵品に関する調査研究の発表回数（回）	10 回	6 回		
		7	コレクションを活用した教育普及プログラム数（件）	15 件	16 件		
		8	修復したコレクションの件数・費用（件・千円）	4,000 千円	6 件 496 千円		
		9	公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート【定性】	—	別添		

基本方針	B　人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します

計画（P）					実施状況（D）R5.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	備考	自己評価
1	新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します	10	展覧会の来館者数（人）	118,000　人	98,861　人	◆は、自主企画・企画参加型展覧会	【成果】 ・「大展示室展」 通常、作品鑑賞に集中出来るよう隠してある、作品保全に関わる美術館の諸機能を、あえて前面に打ち出した展覧会であった。一般的には見ることが出来ないバックヤードやケースの裏側、様々な道具類や照明器具等は、多くのお客様に関心を以て迎えられた。展示の準備として、この美術館の設立経緯を当時の資料から探ることで、創設時の模型や文書等を再発掘、整理することが出来、これらの一部もご観覧頂くことが出来た。美術館の機能、そして美術館建設に携わった先人が求めていたものを示すことで、美術館とは一体何であるのかという、根源的な問いを提示することとなった。美術作品が1点も無い展覧会であったが、来館したお客様には十分にお楽しみ頂けたと思われる。 ・「兵馬俑と古代中国」 古代中国の文化、歴史について、兵馬俑を中心とする様々な文物により紹介することができた。中国の考古をテーマとする企画は、当館にとっては18年ぶりの機会である。コロナ禍のため、全日予約優先制を導入し、来場者が集中することを避けたため来場者数に懸念があったが、幅広い年代層の約6万3千人の来場があった。 ・「絶景を描く―江戸時代の風景表現」 館蔵品と寄託品の中から風景を題材とした日本画作品を選りすぐり、時代を追って展示することで、その魅力や歴史的意義を改めて紹介することができた。また、展示室では、出品作品の一部について、描かれた景勝地の写真と比較を交えて解説し、風景がどのように絵画化されているのか明らかにすることを試みた。 ・「みる誕生　鴻池朋子展」 研究活動評価委員によるレポート、アンケート結果を見ると裏山での展示が高く評価されている。入場者を分析すると、高齢者の割合が、当館の一般的な展覧会に比べ少なく、その影響からか平日の来館者数がいまひとつ伸びていない。逆に休日は家族や親子づれの来館者が多く、ロダンウィークのマルシェと重なった開幕初日をはじめ週末、祝日は200人を超えにぎわった。『美術手帖』2023年1月号で鴻池朋子特集が組まれ、同号が発行になってからの入館者増が追い風となって、目標観覧者数の8000人を超えることができた。 ・「近代の誘惑―日本画の実践」 所蔵品および寄託品によって幕末から昭和にいたる日本画の変遷を紹介した。作品本位に語ることを重視しつつ、ポイントとなる用語の解説を丁寧に加えることで、美術や絵画の仕組みが作られるのに伴いめまぐるしく変化していく近代の日本画界の様相を分かりやすく示した。これまで公開機会の少なかった寄託品を努めて取り上げ、広く紹介する機会とした。 【課題】 ・「大展示室展」 前年度工事後の枯らし期間（化学物質の換気期間）を活用した展覧会であり、同様の機会を持つことは困難かと思われるが、より小規模な展示であれば、美術館機能の周知という点で、意義があると思われる。美術館建設時の資料は、今回展示に関わる部分のみ整理に着手出来たものの、更なる調査と資料保存の対策が望まれる。 ・「兵馬俑と古代中国」 収支は最終的には黒字となったが、予算が非常にタイトに組まれており、執行時には多大な努力を要した。多額の支出と収入を伴う大規模な企画展については、充分に精査して予算組みを行う必要性があるだろう。また、静岡会場の実行委員会立ち上げのための会合から5ヶ月後に開幕という準備期間は短く、広報や展示プランを検討する時間は余裕を持たせた方がよいと考えられる。 ・「絶景を描く―江戸時代の風景表現」 入館者数が伸び悩んだ。現在も観光地として親しまれている場所を描いた作品も展示されることから、県内の関係する観光施設などを中心に、広報物を追加送付していたが、想定していたほどの効果はなかったとみられる。県外からの来館の割合が少なかったことから、SNSをはじめインターネットを介した周知方法を積極的に活用すべきだった。 ・「みる誕生　鴻池朋子展」 鴻池朋子は美術に詳しいコア層には良く知られているが、静岡の一般の美術館来館者にはまだ広く知られているとは言えない。コアなファン層をひきつけながら、潜在的に関心を持ってもらえそうな層にむけて、美術館がどのような手段で情報を届けるのかは永遠の課題である。今後、鴻池のような先鋭的な作家の展覧会を行い安定した来館者数を獲得するためには、新聞、雑誌とともに、SNSの発信力や口コミの影響力の大きさを再認識して、未来館者への訴求力を高める戦略を練る必要がある。 ・「近代の誘惑―日本画の実践」 予算上の問題により図録の作成ができなかった。展示機会の稀な作品も多く含まれたことから図録購入の希望も多く寄せられており、この点は大きな課題である。
		11	◆大展示室展（39日間）		7,116　人		
			兵馬俑と古代中国 （64日間）		63,254　人		
			◆絶景を描く―江戸時代の風景表現（39日間）		4,721　人		
			◆みる誕生　鴻池朋子展（54日間）		8,642　人		
			◆近代の誘惑―日本画の実践（32日間）		5,461　人		
			収蔵品展（235日間）		8,296　人		
			移動美術展 （富士市文化会館ロゼシアター ９日間）		1,371　人		
		11	自主企画・企画参加型の展覧会の回数（回）	4　回	4　回		
		12	作品やテーマに興味を持った人の割合（%）	90.0　%	91.8　%		
		13	展覧会に対する外部評価 【定性】	―	別添		
2	他の美術館・大学との連携を進め、企画力を強化します	14	調査研究の発表回数（回）	20　回	26　回		【成果】 ・指標14は、論文発表等のほか大学や他館への出講を含む。前年度に比して増加しており、他機関と連携しながら学芸員の調査研究の成果について広く発表の機会を作ることができた。 ・指標16は、①特集展示「輞川図と蘭亭曲水図」関連シンポジウムの開催、②静岡県博物館協会事務局としての活動、③静岡県立大学の展覧会見学事業の実施を計上した。①について、当館におけるシンポジウム開催は数年ぶりのこととなるが、大学や他館の第一線の研究者を招聘した充実した内容となり、多くの聴講者を得て、成果を挙げた。 【課題】 ・内部セミナー・研修等の実績は横ばいが続いている。対外的な発表の機会だけでなく、企画力の底上げのためにも、多様な研修の機会を増やしたい。 ・他の美術館や大学と連携した取組み件数については、例年の活動だけでなく、シンポジウム開催のように新たな取組みを継続して実施していくための日頃の継続的な連携推進が必要である。
		15	内部セミナー・研究会・研修の回数（回）	12　回	11　回		
		16	他の美術館や大学と連携した取り組み件数（回）	3　回	3　回		
		17	調査研究に関する外部評価 【定性】	―	別添		

基本方針	C 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

計画（P）					実施状況（D） R5.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	備考	自己評価
1	質の高い芸術教育と普及のプログラムを開発します	18	学校教育と連携した取り組み数(件) うち特別支援学校と連携した取り組み数（件）	100 件 10	91 件 10 件		【成果】 ・新型コロナウイルス感染症の対策を行い、全ての事業を予定どおり実施できた。 ・当初計画にはなかった展覧会関連普及事業や、館外でのちょこっと体験が加わり、一般向けのプログラム数と参加者数が当初の計画、見込みより多くなった。幅の広いプログラムを提供することで、展覧会の理解にもつながったと思われる。 ・昨年度実施のなかったロダンウィークのコンサートも開催し、他のイベントもあわせ、以前のような活気あるロダンウィークとなった。 ・webを活用したプログラムとして、オンライン鑑賞教育プログラムを2本開発した。来館が容易ではない遠方の学校においても利用が望まれる。 【課題】 ・一般向けの事業は参加者数が多かったが、学校・園向けの事業は、人数で言えば振るわなかった。コロナ禍により、美術館が対応可能な人数が制限され、学校・園の利用にとって障壁となっていたのかもしれない。再び利用を促進し、連携の接点を生み出すよう、様々な機会を活用する必要がある。 ・粘土貸出の利用人数は予定の2倍を超えたが、アートカードの貸出が急減している。コロナウイルスの5類移行に伴い、貸出の間隔をあける必要がなくなるため、利用を呼びかけていきたい。 ・webを活用したプログラムについては、これからも要望はあると考えられ、引き続き拡充できるよう体験講座や教材作成のための予算獲得が必要である。
		19	鑑賞系プログラム数	15 件	17 件		
		20	webを活用したプログラム数（件）	2 件	2 件		
		21	普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート 【定性】	—	別添		
2	講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を充実します	22	講演会等の開催件数（回）	80 回	79 回	指標22 指標23（67）＋特別講演会・シンポジウム(4)＋ボランティア等によるギャラリーツアー(6)＋演奏会等（2） 指標23 美術講座(13)＋フロアレクチャー(24)＋オリエンテーション(19)＋出張美術講座(6)＋展示関連普及事業（5） 指標24 ちょこっと体験（2件908人）＋ロダン館コンサート（2件230人）＋ロダンウィーク・絶景考Ⅱクイズラリー（1件320人）＋鴻池朋子展・筆談ダンス（1件40人）＋ボランティアによる情報コーナーのお茶会（2件100人）	【成果】 ・講座等のイベントについては、各担当が様々立案し、当初予定より実施回数が増加し、参加者数も多かったと言える。企画展ごとに館長による美術講座を開催したほか、アーティストを呼んでのトークや、専門性の高いシンポジウムなど、さまざまな事業が開催された。 ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大によるイベント中止はなかった。また、コロナ禍における講師のオンライン対応が実施方法の一つとして定着しており、1本はオンライン対応となった。 ・フロアレクチャーが全館で再開され、混雑が予想される兵馬俑展を除く展覧会で実施された。 ・ギャラリーツアーが2月より再開され、6回の実施があった。 ・館内空間を活かした催事では、ちょこっと体験をはじめ、C－1でも述べたロダンウィークでのコンサートや、展示関連普及事業の「筆談ダンス」、本年度より開設された情報コーナーでの茶会などを実施することができた。 【課題】 ・今後も様々なターゲットに向けた企画立案が求められ、幅広いイベントがバランス良く配されるよう、検討、実施する必要がある。 ・コロナ禍という外的な要因とは言え、オンライン対応のノウハウを得た。今後はポジティブな実施手段として、オンラインを利用する。 ・ボランティアの任期を1年、更新制としたため、今後ギャラリーツアー担当ボランティアのノウハウや知見の蓄積が保持されるか、注視したい。
		23	学芸員のフロアレクチャー等の数（回）	50 回	67 回		
		24	館内空間を生かした催事の件数・参加者数（件・人）	10 件 1,000 人	8 件 1,598 人		
3	地域住民、企業、文化関係団体等と連携した美術館活動を充実します	25	地域住民等と連携した取組数	4 件	7 件	指標25 ・ボランティア活動 ・館内レストランとの連携 ・「文化の丘フェスタ」クイズラリー ・県立大学と連携した「ムセイオン静岡」の講義 ・草薙商店会との連携 ・一般社団法人「草薙カルテッド」との連携 ・美術館ボランティア「地域連携・草薙ツアー」グループとのイベント企画	【成果】 ・ボランティア活動については、コロナ禍で活動を休止していたギャラリーツアーグループ、学校グループは、日本博物館協会による9月の予防ガイドラインの変更を受け、活動が可能となった。 ・館内レストラン「ロダンテラス」と連携し、県産食材を使用したメニューの提供や料理教室を行った。 ・地域に密着したイベントとして、草薙商店会が作成する動画作成に参加し、協力した。 ・「草薙カルテッド」の会員向けニュースレターへの美術館情報を掲載した。 ・美術館ボランティア「地域連携・草薙ツアーズ」グループと連携し、美術館の茶畑で採れたお茶を使用したお茶会を開催した。 【課題】 ・アフターコロナを見据えて、観光業界やアーツカウンシルしずおかとの連携など、地域連携の在り方を引き続き検討していく必要がある。
		26	地域住民、企業、文化関係団体等と連携した取組に関する職員レポート 【定性】	—	別添		

基本方針	D さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます

計画（P）					実施状況（D） R5.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	備考	自己評価
1	広報戦略を策定し、広報の質を高めます	27	美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合	80.0 %	75.5 %		【成果】 ・令和4年度当初からデジタルアーカイブを公開し、大きなトラブルもなく運用することができている。新収蔵品の数が多かったものの、一括登録機能を用いて、迅速に作品情報を公開することができた。管理面でも新項目を設けるなどの微調整を行い、作業のしやすい環境を整備している。 ・新たに受け入れた図書についても、速やかに登録・公開を行い、順調にデータ数を増やしている。管理面では、雑誌やその他の定期刊行物の目録を新たに登録し、書庫内の資料を一元的に管理するシステムが構築できた。 ・前年度から始まったボランティアによる現代美術関連資料の遡及入力作業が進み、前年度末から約1.5倍に増加し、10,000件の大台に迫っている。 ・ウェブサイト全体のアクセス数は、デジタルアーカイブが公開され、コンテンツも増えたため、前年度よりも増加した。 ・SNS別にみるとfacebookとこれに連動するインスタグラムのリーチ数は増加し、後者はエンゲージメント数も増加している。一方、ツイッターはインプレッション数、エンゲージメント数どちらも減少している。ただし、前年度の数字の多くは、エジプト展開催期間中、混雑状況や当日整理券配布告知を頻繁にツイートしたことが要因とみられる。 【課題】 ・引き続き、図書情報の追加校正や、現代美術関連資料の遡及入力が課題となっている。後者については進展があったが、全件の入力が完了するまで数年を要するとみられる。 ・多角的な情報発信のため、収蔵品等検索システムは当館だけで完結させるのではなく、他機関のシステムと横断検索を可能とするなど、外部との連携体制を模索する必要がある。 ・広報については、広報アドバイザー等の専門的な知識を有した方々からの助言等を積極的に取り入れ、個々の職員の広報スキルを底上げし、効果的な広報を行っていく必要がある。また、高度に情報化された現代社会において効果的な広報を行うには専門的な人材が不可欠であり、その適切な配置について県庁と連携して取り組んでいく。
		28	デジタルアーカイブによる情報発信 作品作家情報の公開・更新件数（件） 現代美術関連資料の公開件数（件） 図書情報の公開件数（件）	3,200 件 9,000 件 23,150 件	3,222 件 9,534 件 23,293 件	公開・更新件数 作品作家 288件 現代美術関連資料 3,230件 図書 642件	
		29	ホームページのアクセス件数	1,000,000 件	1,240,277 件		
		30	facebook、インスタグラム、ツイッターのビュー数（件）	1,000,000 件	719,846 件	facebook ページリーチ数 79,338 インスタ ページリーチ数 10,046 ツイッター インプレッション数 630,462	
		31	facebook、インスタグラム、ツイッターのエンゲージメント等の件数（件）	30,000 件	24,556 件	facebook エンゲージメント数 2,373 インスタ エンゲージメント数 4,723 ツイッター エンゲージメント数 17,460	
2	観光業界等と連携した新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます	32	観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数	7 件	7 件	指標32 ・生涯学習センターにおける講座で紹介 ・大学の講義内で紹介 ・旅行会社による美術館めぐりツアーへの協力 ・出品作品をモチーフとした創作和菓子を元にしたイベント実施 ・館内レストランにおける展覧会関連メニューの提供3件 指標33 ・大学の講義内で紹介 ・事務局を通じた県内4大学の学生への広報2件	【成果】 ・コロナ禍の影響により県観光協会主催の教育旅行説明会等のイベントの実施が困難となり、来館者増加に向けた積極的な広報連携取組を行うことが難しかったが、静岡文化芸術大学、静岡大学等での講義内で展覧会の紹介をした。 ・指標33については、静岡県立大学、静岡文化芸術大学、静岡産業大学、常葉大学の学生に対し、事務局を通じて一斉メールで企画展の内容を広報した。 【課題】 ・アフターコロナを見据えて地域連携及び観光業界との連携を模索し、来館者増加に向けた美術館の発信力を更に高めることが必要である。
		33	教育機関への情報発信数（件）	7 件	3 件		
		34	広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート【定性】	—	別添		

基本方針	E 環境・施設の整備や運営基盤の強化に努めます。

計画（P）					実施状況（D） R5.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	備考	自己評価
1	館内施設を充実させ、満足度を高めます	35	美術館利用者数	200,000 人	167,009 人	令和4年度は次の工事（小規模を除く）を行った。 ・監視カメラ設備更新工事 ・トイレ洋式改修工事 ・本館外壁タイル（南面）修繕工事 ・本館軒天井修繕工事 ・本館石畳歩道修繕工事 ・本館プロムナード柵修繕工事 ・本館プロムナード屋外照明更新工事 ・本館整流器盤他更新工事 ・本館ファンコイルユニット更新工事 ・本館レストラン冷凍冷蔵庫更新工事 ・本館レストラン給水配管更新工事 ・ロダン館天井漏水修繕工事 ・ロダン館遊歩道外灯設置工事 ・ロダン館1階ホール照明更新工事	【成果】 ・新型コロナウイルスの影響などにより、「美術館利用者数」は目標を達成することができなかったが、令和4年6月から令和5年1月までの間の時間制予約の導入により来館者の分散を図るなど、感染防止対策の徹底と鑑賞環境の改善に努めた。 ・令和4年度は1ヶ月間休館して中期維持保全計画に基づく工事を行った。監視カメラの更新で館内をより鮮明に監視できるようになり、防犯体制が強化された。トイレ洋式改修工事を行い、館内の全てのトイレが洋式化された。ロダン館1階天井ホールの照明をLED化し、より快適な鑑賞空間となった。また、老朽化していたレストランの給水配管及びバックヤードのファンコイルユニット等を更新した。 その他、遊歩道の街灯や石畳、プロムナードの柵等、屋外設備の修繕等も行った。 ・レストランの満足度は、令和3年度の92.4%から94.4%にに上がり、目標を上回った。食材の高騰やコロナによる人員不足もある中、ガストロノミーツーリズム事業により県産材を使用した特別メニューを提供するなど工夫を図った。 ・ミュージアムショップの満足度も令和3年度と同様97.1%であり、目標を上回った。これは、企画展に合わせて商品の品揃えやレイアウトを工夫していることの成果であると考えられる。 【課題】 ・開館から35年が経過し、施設の老朽化が進行している。引き続き、施設の適切な維持管理に努めるとともに、令和2年度に策定した中期維持保全計画に基づく改修を計画的に進めていく必要がある。 ・今後も安心して来館していただける環境を整備する必要がある。 ・レストラン、ミュージアムショップの運営は、業者に委託をしているが、美術館としても、来館者のニーズの把握に努め、引き続き高い満足度を維持していく必要がある。
			展覧会観覧者数		98,861 人		
			教育普及プログラム参加者数		9,433 人		
			ミュージアムコンサート入場者数		230 人		
			県民ギャラリー入場者数		27,447 人		
			講堂入場者数		4,063 人		
			レストラン利用者数		9,216 人		
			ミュージアムショップ利用者数		16,655 人		
			図書閲覧室利用者数		1,104 人		
		36	鑑賞環境に対する満足度	90.0 %	85.3 %		
		37	レストランに対する満足度	92.0 %	94.4 %		
		38	ミュージアムショップに対する満足度	97.0 %	97.1 %		
2	周辺環境やアクセスの利便を向上させます	39	来館者のアクセス満足度 ※上段：公共交通機関利用 下段：自家用車利用	70.0 % 70.0 %	80.9 % 60.3 %		【成果】 ・当館への利用交通機関で最も多い自家用車でのアクセス満足度は、60.3%と目標の70.0%には達しなかったものの、昨年度の55.7%から約5%向上した。 ・来館者が多く見込まれた「兵馬俑展」では、駐車場待ちによる交通渋滞を招かないよう、交通誘導員の配置や隣接する県立大学の職員駐車場の借用などの対応を行った。 ・公共交通機関を利用する来館者の問い合わせには、「JR草薙駅から運行する100円バスを利用するのが便利であること」の周知に務めた。 【課題】 ・自家用車利用者のアクセスについては、敷地内に無料の駐車場があるものの収容台数が約400台と限られていること、近くの駐車場から満車になるため、離れた駐車場になると美術館までの徒歩区間が長く、登り坂であることがアクセスに満足できない要因になっている。 ・自転車、バイクなどの交通手段への対応が十分とは言えず、駐輪場の整備が望まれる。
3	運営基盤を強化します	40	運営基盤の強化等に関する職員レポート【定性】	—	別添		【成果】 ・令和4年3月から、県内企業との関係強化を目的として、静岡県経営者協会と企業連携について協議を開始し、美術館の年間スケジュールや企画展のちらしを全会員に配布した。秋に予定されていた館長および学芸員による会員向け講演会は感染状況の悪化により中止となったが、令和5年度は館長がビジネスとアートに関する講演を行う予定である（計3回）。 ・「輞川図と蘭亭曲水図」関連シンポジウムおよび記録集の刊行は、助成金の獲得により充実を図ることができた。 【課題】 ・国や財団法人からの補助金、民間企業からの協賛金、ふるさと納税を活用した企業や個人からの寄附金など外部資金の確保に向け、積極的に動いていく必要がある。 ・県内企業に社員教育や複利厚生、顧客へのサービス向上のために、美術館を活用してもらい、企業の企画展チケット購入や寄附に繋げていく必要がある。

評価指標7、18、19内訳　教育普及プログラムの実績

事業名	評価指標7	評価指標18			評価指標19
	コレクション活用プログラム	学校教育と連携した取組数	人数	うち特支と連携した取組数	鑑賞系プログラム
特別講演会			370		○
美術講座	○		682		○
フロアレクチャー	○		340		○
ギャラリーツアー	(中止)→○		45		(中止)→○
オリエンテーション ※人数は学校以外団体も含む			735		○
ちょこっと体験	○		1240		
創作週間			392		
実技講座	○		41		○
えのぐ開放日			186		
ねんど開放日			341		
わくわくアトリエ	○		28		○
夏休み子どもWS			10		
ロダン館デッサン会	○		339		○
ロダン館普及事業	○		481		○
タッチツアー	(中止)		–		(中止)
地域連携事業			100		
展覧会関連普及事業(コンサート等)		1	424		○
出張美術講座	○	5	305	0	○
展覧会・収蔵品関連普及事業及び美術館活用事業、他館連携事業(フェス)	○		–		
ねんど教室		13	322	1	
えのぐ教室		23	474	3	
音のかけら	○	0	0	0	○
ロダン館デッサン実習	○	5	87	0	○
ロダン館鑑賞、ななふしぎクイズ	○	7	175	2	○
美術館の秘密を探れ		2	35	0	
学校向けボランティアスタッフとの鑑賞	(中止)→実施無		0		(中止)→実施無
職場体験、インターンシップ　※延べ人数		1	3	0	
粘土貸出		14	1218	3	
レプリカ貸出	○	10	665	1	○
アートカード貸出	○	6	337	0	○
教員研修	○	4	58	0	○
	16	91	9433	10	17